

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(1年計画の1年目)

1. 研究課題

科学的知識の共同性を支えるメディア実践に関する学際的研究

Interdisciplinary Study on Media Practices in the Collective Production of Scientific Knowledge

2. 研究代表者氏名

河村 賢

Kawamura Ken

3. 研究期間

2022年4月-2023年3月(1年目)

4. 研究目的

科学社会学や科学人類学における実験室研究の登場以降、科学知識の研究において「実践」の解明が重要な目標の一つとなっている。ラトゥールやウールガーらが切り開いた実験室研究は、あるローカルな場所で行われる科学的活動の結果が、どのようにして真理や科学的知識といった場所や時代に拘束されないより普遍的なものへと変換されるのかを明らかにするという方向性を示したが、こうした研究は科学を対象とする人文社会科学の諸ディシプリンの垣根を超えて探究可能な方針を指し示している。実際、シェイピン&シャッフアーの『リヴァイアサンと空気ポンプ』や、ダストン&ギャリソンの『客観性』は、科学研究における公開実験のあり方や科学アトラスにおける図像の用いられ方に照準することで、科学的知識の真理性や客観性への信頼がやはりある歴史的状況のなかから生まれてくることを論じた。本プロジェクトはこうした方向性を承け、科学者が自分の持っている知識や証拠を他者にも理解可能なものとして提示する際に依拠する様々なメディアの用いられ方を、学際的な視座から分析する。

Laboratory studies pioneered by Latour and Woolger have demonstrated the potential of investigating how products of scientists' local and collective activities are transformed into objective knowledge applicable beyond specific time and place. This topic can be pursued in broader fields of social studies and humanities. In line with this interdisciplinary perspective, our study focuses on how various media are employed to produce, transform, and distribute scientific knowledge.

5. 本年度の研究実施状況

2022年4月から休暇期間を除き月1回ペースで班員及び外部ゲストによる研究発表を行った。発表のテーマはアメリカのテロリズム研究における合理的行為者の概念、日本における除虫菊の栽培と産業化、反核映画における被爆者の身体表象、戯曲の脚本において理解可能となっている天才の概念のありようなど多岐にわたったが、それぞれの研究対象に関連する知識の生成と伝播において学術論文、映像データ、商業映画といったさまざまなメディアが果たした役割について、活発な議論が交わされた。6月と7月には近年刊行された科学史とメディア論にまたがる領域における重要な研究書である『X線と映画』『客観性』『ラボラトリー・ライフ』の翻訳者を招き、図像や映像が媒介した客観性の概念の歴史的变化について探究することと、具体的なラボにおける科学者のやりとりを分析することを、等しい視座から推し進める可能性について討議した。

6. 本年度の研究実施内容

2022-04-27 例会（オンライン） 知識の歴史と知ることの歴史 発表者 岡澤康浩 京都大学

2022-05-25 例会（オンライン） 我々がテロリストを理解しようとしていたとき：狂気・抑圧・合理性 発表者 河村賢 大阪大学

2022-06-18 リサ・カートライト『X線と映画』合評会 日本の医学界における映画活用の歴史 発表者 藤本大士 日本学術振興会／京都大学 リサ・カートライト著『X線と映画 医療映画の視覚文化史』 発表者 田中祐理子 神戸大学 訳者リプライ コメンテーター 望月由紀 東都大学 訳者リプライ コメンテーター 長谷正人 早稲田大学

2022-07-24 人文研アカデミー「実践としての科学認識：『客観性』『ラボラトリー・ライフ』を読む」 『ラボラトリー・ライフ』紹介 発表者 金信行 東京大学 『客観性』紹介 発表者 瀬戸口明久 京都大学 実践における概念を研究するとはどのようなことか？ 発表者 前田泰樹 立教大学 発表者 鈴木舞 東京電機大学 科学論の理論と科学史研究の実践 発表者 金凡性 東京理科大学 全体司会 司会 森下翔 大阪大学 全体司会 司会 岡澤康浩 京都大学

2022-09-28 例会（オンライン） 機械化時代における音楽・科学・人間——兼常清佐のピアノの実験 発表者 瀬戸口明久 京都大学

2022-10-26 例会（オンライン） Making Malformed Body: Discourse and Representation of Radiation

Exposure in Kamei Fumio's Anti-Nuclear Documentary Film 発表者 中尾麻伊香 広島大学

2022-11-02 特別研究会（対面） 天才であることの達成：戯曲『アマデウス』の会話分析 発表者 吉川侑輝 立教大学 コメント コメンテーター 岡田暁生 京都大学

2022-11-16 例会（オンライン） Modernisation and Insecticides: Japan as the World's Leading Grower and Exporter of Pyrethrum Flowers, 1880s-1950s 発表者 キリル・カルタシヨフ ヨーク大学（英国）

2023-02-15 例会（オンライン） 先端科学技術をめぐる ELSI/RRI 議題の アセスメント実践と課題 発表者 標葉隆馬 大阪大学 知識を問うことが〈賭け〉になるとき

科学コミュニケーションのなかの実践的推論 発表者 河村賢 大阪大学 「ELSI/RRI 研究」を作りあげる：新しい種類の研究者の存在様式の構築をめぐる 発表者 森下翔 大阪大学

7. 共同研究会に関連した公表実績

人文研アカデミー「実践としての科学認識：『客観性』『ラボラトリー・ライフ』を読む」吉川侑輝, 2022, 「天才と出会う ――サリエーリとモーツァルトの対話」 (<https://haruaki.shunjusha.co.jp/posts/6835>) .

岡澤康浩, 2023, 「書記技術のマテリアリズム：ブリュノ・ラトゥールのメディア論のために」『現代思想』51(3): 264-274

8. 研究班員

所内

岡澤康浩、瀬戸口明久

学内

藤本大士(京都大学大学院教育学研究科・日本学術振興会)

学外

河村賢(大阪大学社会技術共創研究センター)、標葉隆馬(大阪大学社会技術共創研究センター)、中尾麻伊香(広島大学大学院人間社会科学研究科)、森下翔(大阪大学社会技術共創研究センター)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
			(内女性)					(内女性)			
人文研所属 (内女性)		3 (0)		1			20 (0)		9		
京大内 (人文研を除く) (内女性)		4 (0)	1		1	1	16 (0)	4		8	3
国立大学 (内女性)		6 (3)		2 (1)	1	1	42 (12)		9 (7)	7	1
公立大学 (内女性)		0 (0)					0 (0)				
私立大学 (内女性)		7 (2)					13 (4)				
大学共同利用機関法人 (内女性)		0 (0)					0 (0)				
独立行政法人等公的研究機関 (内女性)		0 (0)					0 (0)				
民間機関 (内女性)		0 (0)					0 (0)				
外国機関 (内女性)		1 (0)	1				1 (0)	1			
その他 ※ (内女性)		0 (0)					0 (0)				
計	0	21 (5)	2 (0)	3 (1)	2 (0)	2 (0)	92 (16)	5 (0)	18 (7)	15 (0)	4 (0)

※「その他」の区分受入がある場合
具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員
無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	1		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0		0	
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0		0	
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名（必須）	掲載論文数（必須）	掲載年月日（必須）	論文名（必須）	発表者名（必須）
1	現代思想	1	R5.3	書記技術のマテリアリズム：ブリュノ・ラトゥールのメディア論のために	岡澤康浩

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書
なし

12. 博士学位を取得した学生の数(人)

	人数
博士学位を取得した学生の数	0

13. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由
なし

14. 次年度の研究実施計画
なし

15. 次年度の経費
なし

16. 研究成果公表計画および今後の展開等

定例研究会で行われた研究発表は、今後各自が自らの領域における代表的な学術誌への投稿を見据えて、論文化を進めていく。また来年度以降の『人文學報』に、今年度の研究班課題を総括するような小特集と個別の投稿論文を掲載するべく、準備を進めていく。